
あめ

やぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あめ

【著者名】

Z95090

【作者略名】

やせ

【あらすじ】

三題詰です。短いです。飴です。

ya giri mōkōさんは、「朝の病院」で登場人物が「さめる」、「飴」という単語を使ったお話を考えて下さい。

真っ白なシーツ。真っ白な部屋。薬品のにおいが満ちている。いつまで、ここに居ればいいのか。なんだかんだで楽しみが無くなつてきている。ほぼ変化のない個室では退屈になる。半身起こして棚へと手を伸ばす。病院の購買で買つてきた飴を袋の中から取り出す。朝の日の光を浴びて、ルビーのようにキラキラ光る飴。それを口の中に放り込む。唾液と反応してイチゴの甘さが口の中に広がり、球体の線に沿つて舌で舐める。口の中にしつこく残る嫌な甘さ。ガリツ、という音を立ててそれを噛み碎く。

俺は飴のしつこさが嫌い。口の中に甘さがまとわりついて離れない。だから、噛み碎く。噛み碎いて、噛み碎いて口の中にまとわりつかせずに食べるには好き。飴は舐めるものではなく、食べるもの。球体から小さい欠片となつた宝石を飲み込む。嫌な二個目の飴を袋から取り出し、口に放り込む。今度は舐めもせず、直ぐ様噛み碎く。

「ねえ、話聞いてるの？」

来客用の椅子に彼女は座つていた。僕の肩をガシッと掴み振り向かせる。

「聞いてなかつた。でなに？」

彼女の手の暖かさが肩からふつと消えた。途端に肩は冷えてくる。

「いつも……そうだよね。話聞かないし」

「いつもじゃない。聞くときは聞く」

三個目の飴を口の中に放り込む。何故か、噛み砕けない。

「そり……」

彼女は顔を伏せた。僕の顔を見たくないのだろうか。ただ、君の世界と僕の世界では温度が違う。それだけ。君の世界は動いてるが、

僕の世界はとまってる。動かなきや熱は生まれさえしない。口の中で飴は溶けてしまつて、甘さはしつこく残つていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9509o/>

あめ

2010年11月16日12時14分発行